

極秘

昭和二年十一月調

鴨綠江採木公司ニ関スル調書

亞細亞局第二課

鴨綠江採木公司ニ関スル調査

目次

- 一、採木公司ノ設立及組織
- 二、事業ノ内容
- 三、従来ノ事業成績
- 四、殘年度ノ事業成績見込
- 五、採木公司ノ専採區域擴張計畫経緯
- 六、採木公司ト下問題経緯
- 七、採木公司最後處分案

鴨綠江採木公司ニ関スル調書

一 採木公司ノ設立及組織(昭和二年十一月調)

鴨綠江採木公司設立ノ沿革ヲ見ルニ明治三十八年十二月二十一日日支兩國間ニ締結セラレタル「滿洲ニ関スル日清條約附屬協定」第十條

清國政府ハ日清合同材木會社ヲ設立シ鴨綠江右岸地方ニ於テ森林截伐ニ從事スルコト其ノ地區ノ廣狹年限ノ長短及會社設立ノ方法並ニ合同經營ニ関スル一切ノ章程ハ別ニ詳細ナル約束ヲ取極ムヘキコトヲ承諾ス日清兩國株主ノ利権ハ均等分配ヲ期スヘシ

トノ協定ニ基キ兩國政府ハ明治四十一年五月十一日鴨綠江日清合同材木會社ノ件ニ関スル取極書十三箇條ヲ協定シ大要

鴨綠江右岸帽兒山ヨリニ十四道溝ニ至ル間該江面ヲ  
距ル六十浬里内ノ材木ハ兩國合資ヲ以テ伐採事業ヲ  
經營シ創業ノ始メハ兩國ヨリ派員シテ局ヲ設ケテ管  
業シ一箇年後一切ノ事務整頓妥當トナリタルヲ俟チ  
テ兩國ヨリ招商兼辦セシムルコトヲ規定シ(第一條)  
会社ノ名称ハ鴨綠江採木公司ト稱シ(第二條)資本  
金ハ三百萬元トシ日支兩國ヨリ各半額ヲ出資シ(第  
三條)經營期間ハ二十五箇年トシ満期ニ至リ清國政  
府ニ於テ会社ノ事業ヲ高ホ妥當ナリト認ムルトキハ  
会社ハ清國政府ニ對シ期限延長ノ認可ヲ求ムルコト  
ヲ得(第七條)

ルコトヲ約定セルカ更ニ同年九月十一日「鴨綠江採木  
公司業務章程」ニ十一箇條ヲ約定シ開業ノ日時職員俸

給、會計、税金、代採地域等ニ関スル章程ヲ定メ同時ニ  
公司ノ會計ハ銀元ニ依ルコト(第一)創立費ノ措  
置(第二)業務ニ関スル警察事宜ハ總テ清國警察  
ノ管理ニ歸スルコト(第五)及業務章程ノ改正ニ  
関スル事項(第六)  
等ヲ協定シタル覺書ヲ交換シ茲ニ本公司ノ成立ヲ見  
タリ

而シテ右業務章程ニ於テ定メタル職負ハ左ノ如シ  
督辦一人、奉天督撫ヨリ東辺道台ニ命シテ兼任セ

シメ会社ノ經營事業ヲ監督ス  
理事長二人、日清兩國ヨリ各一人ヲ任命シ会社一

切ノ業務ヲ經理ス  
理事二人以上、理事長協議ノ上選任シ各政府ニ報

告スルモノトス  
 技師及其他ノ職員、若干名、理事長協議ノ上採  
 用ス  
 理事以下ノ職員数ハ西國人ヨリ同数ヲ出ス  
 コト

採木公司事務所及主管事務表

事務所 主管事務

本局(安東)	總轄
通化分局	請負伐採及貸金伐採、漂小整理
八道溝分局(臨江縣)	同上
帽兒山分局(同上)	同上及直管伐採
十三道溝分局	同上
長白分局	直管伐採
方正縣出張所	同上
馬市臺分所(安東縣)	同上
沙河鎮分所(同上)	同上及貯木
六道溝貯木所(同上)	貯木

三 事業内容

鴨綠江採木公司ハ鴨綠江本流右岸明兒山ヨリ二十四道  
溝ニ至ル間江面ヲ距ルユト六十浬里以内ヲ專採區域  
ト爲シ直接採伐事業ニ自營スル外其ノ畧外及支流輝江  
ノ森林即チ鴨綠江流域中支那側ヨリ産出スル木材ハ全  
部之ヲ買収スルノ特權ヲ有ス  
右ニ就キ大正十三年採木公司測定ニ據レハ專採區域内  
直接林相地ノ立木材積ハ一五、七、〇、〇、〇尺締ニシテ  
左ノ中利用材積ハ六八五、〇、〇、〇尺締ナリ  
而シテ同公司ノ事業範圍ハ

- (一) 木材ノ採伐
- (二) 採伐資金ノ貸付
- (三) 木材ノ買収

(四) 木材ノ販賣

(五) 漂木ノ整理

(六) 木材ノ寄託保管

各項ニシテ之ヲ詳説スレハ次ノ如シ

(一) 木材ノ採伐ハ日支協定ニ依ル鴨綠江岸ノ專採區域ニ於ケル直管ノ伐採及專採區域外ナル支流渾江ノ流域ニ於ケル森林地帯ニ於テ請負伐採セシメ之ヲ編笥流下スルモノトス

(二) 採伐資金ノ貸付ハ彼支那側カナシ東レル鴨綠江材採伐ノ方法ニシテ料棧又ハ把頭ニ資金又ハ物品ヲ貸與シ其ノ伐材ヲ買入且ツ元利ヲ回收スルモノトス

(三) 木材ノ買收  
採木公司ハ江岸支那産出木材全部ヲ買收シ得ル特權

ヲ有スルコト前記ノ如クナルモノ之ヲ現實ニ行フハ困難ナルヲ以テ木材買收ニ関シテハ買回ノ方法ヲ講シ木材ヲ現實ニ換受セシテ料棧把頭間ノ商談ニ依リ流笥木材ノ取引價格決定マハ之ヲ公司ニ申告セシメ右價格ノ九分ニ相当スル買回料ヲ徴取シテ公司ハ直接買收及賣却ノ煩ヲ避ケ買回料收納ニ依リ利益ヲ見ル方法ヲ採リツ、アリ

(四) 木材ノ販賣

採木公司ノ手ヲ經テ移出セラル、販路ハ安東ニ於テ消費セラル、外朝鮮、天津、山東諸港、南滿洲一帶及日本等ヲ主トス

三 従来ノ事業成績  
 採木公司ノ事業成績ヲ先ク其ノ生産高ヨリ見ルニ最近  
 五箇年同公司ノ生産ニ成ル木材ノ数量、價格及其ノ輸  
 移出状況次表ノ如シ

安東着木材數量及價格表

(最近五箇年間比較)

年次	後	數	木材數量	概算價格
大正十一年	七、〇七二	電柱 二四〇、一一三 連 六三、九八五 本	七、四八五、七七五	二、一七〇
同十二年	四、五四七	電柱 二一三、九七九 連 六四、八四三 本	八、三七七、五五九	三、三八〇
同十三年	四、〇五七	電柱 一九五、九九三 連 九四、八七九 本	六、一一三、六〇六	二、三〇〇
同十四年	四、九九一	電柱 一九一、四六三 連 一三三、八〇八 本	五、九四六、七三五	五、〇〇〇
同十五年	三、〇一四	電柱 一四七、一四七 連 七三、三七一 本	三、九〇九、八四六	四、九〇〇



木材輸出移出先別數量表

(最近五箇年間比較)

輸出先	大正十一年度	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度	大正十五年度
天津	五五,000	六九,000	四八,500	五,500	一五,000
山東	五,000	六七,600	七一九,000		一五,000
諸港	五五,000			一,000	一六,000
大連	一五,000				二七,七四〇
旅順	一五,000				
朝鮮	二〇,000	一三三,000	二九,000	七,500	二〇,000
安東	一〇,000	九九,二〇〇	四〇,000	四,000	九八,000
奉天	八五,000	三〇,000	四六,000	八,000	二〇,000
上海	一〇,000	一七,000			四八,四八六
撫順	五〇,000	一一,000	八,000	二〇,000	一七,〇〇〇
滿洲一帶	五〇,000	二〇,000	二〇,000	二七,000	二二,〇六五
其他				一〇,000	二八,〇〇〇
計	三〇,000	六〇,000	二八,四〇〇	五,五〇〇	五七,〇〇〇

輸出先	大正十一年度	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度	大正十五年度
鞍山					六九,四〇〇
青島	二七,000	二〇,000	六五,000	一五,000	九八,五五〇
日本	五,000	六〇,000	三五,000	七,000	四〇,000
芝罘			一五六,000	一〇九,000	一〇〇,000
計	三〇,000	六〇,000	二八,四〇〇	五,五〇〇	五七,〇〇〇

備考

一 原木ハ連ヲ單位トシ製材ハ尺メヲ單位トス  
 一 製材ハ安東消費原木中ヨリ製材シタルモノトス  
 次ニ其ノ成績ヲ利益金ノ消長ヨリ窺フニ創案後三、四年  
 間ハ其ノ成績見ルヘキモノ無カリシカ大正三年度頃ヨ  
 リ漸次成績ヲ攀々同十年以降利益進増シ同十三年度ニ  
 於テ其ノ極ニ達シタルモノ十四年度以降ハ一般貶退ノ不  
 況及現地ニ於ケル各種被害奉天票暴落等ノ累ヲ受ケテ

成績頗々低下シ今日及ヘリ今創業以來各年度ノ利益  
金ヲ比較セハ次表ノ如シ

鴨綠江採木公司利益金累年比較表

(北洋銀)

年度別	曆年別	利益總額
一	明治四二	二五、〇七、八元
二	全四三	一八、五三、一〇
三	全四四	一八、〇七、六二
四	大正元	一〇、六六、一一
五	全二	二七、四九、一一
六	全三	五三、二九、九六
七	全四	四九、九三、三九

又政府配当金ノ意ヨリ同公司ノ成績ヲ窺フニ資本金三

八	大正五	八〇、三一、三三	四三、五
九	全六	九四、八〇、一九	〇三一
一〇	全七	一、五三、一三	一五一
一一	全八	一、八三、三〇	〇三一
一二	全九	一、七〇、三五	八〇一
一三	全一〇	三、七五、四〇	四六一
一四	全一一	一、八四、五五	八六〇
一五	全一二	一、五〇、八四	三〇〇
一六	全一三	一、一九、七四	七〇〇
一七	全一四	七、五五、五五	〇七〇
一八	全一五	八、七六、五九	六四〇
合計		一、七、七五、二七	四、六四



平	一八	一七	一六
均計	一五	一四	一三

四、九二六、九九三	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	三〇、〇〇〇
二七、四八三	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇
九九三	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇

〇、〇九	〇、〇九	〇、〇九	〇、〇九
一、六四	一、六四	一、六四	一、六四
〇、〇九	〇、〇九	〇、〇九	〇、〇九

四、残年度ノ事業成績見込

鴨綠江採木公司ハ前記ノ如ク最初ノ協定ニ基キ昭和八年度迄ニテ處定ノ事業年度二十五箇年ヲ了ルモノニシテ残年度僅カニ六箇年ヲ剩スニ過キス而シテ右残年度内ニ於ケル事業ノ成績ニ就キ豫測スルニ事業開始以來今日ニ至ル既往十九箇年間ニ於ケル多量ノ伐材ニ因リ原林地ニ於ケル材料立木ノ減少ヲ來シタルハ當然ノ結果ニシテ此儘何等策ヲ講セズニテ進行スルニ於テハ今後從來ノ如キ良績ヲ收ムルコト至難ナルヘシ今之ヲ公司専採区域ニ見ルニ奥地林況ノ内容ヲ精確ニ捕捉スルハ極メテ困難ナルモ該地域ノ森林力一見多量ノ立木ヲ密藏スルカ如キ天ノ實ハ事業開始以來十五ヶ年ニシテ既ニ立木材積約七千五百萬尺締テ伐採シ居リ殊

B

ニ伐材ニ當リテハ良材ヲ次第ニ選伐シ來レル爲漸次森林價值及事業價值ヲ損傷スルニ至レルノミナラス一方大災及虫害ニ依ル森林ノ減滅モ亦甚カラヌトモス右ノ外專採區域内ニ於ケル公司直營以外ノ一般料棧竝木把ノ入山伐採量モ近年益々増加シ直營伐採ノ四五倍ノ高ニ上リ直營伐採ニ脅威ヲ感セシムルニ至レルモノアリ加フルニ採伐地カ漸次江岸遠ク距リテ運材ノ費用増加シ且ツ近年物價ノ騰貴ニ伴フ勞銀ノ増額積年ノ貸款未回收匪賊横行ニ依ル生産能率減少不時ノ旱水害及一般市況ノ不振等ヲ擧ケ來レハ前記林質ノ遞下ニ依ル收入減及伐材ノ減少ニ依ル買回料減少ト共ニ將來公司ノ事業成績ハ樂觀ヲ許ササルモノ多シ而シテ右ニ對スル公司側ノ對策ト見ルヘキハ

1. 固定林場ヲ選定シ一般料棧木把ノ伐採ヲ禁シ公司直營ノミニニテ每年伐採額三十二萬尺締ヲ出スコト

2. 大徑材ハ次第ニ減少セルニ因リ運搬費ノ少額ナル小徑材ヲ選伐利用スルコト

3. 林場ニ輕軌ヲ敷設シ運搬費ノ節約ヲ計ルコト

4. 貸款ノ回收ヲ計リ新貸付ハ確實ナル者ニ限り之ヲナスコト

5. 分局ノ廢合等ニ依リ人件費其他一般經費ノ節約ヲ計ルコト

等ニシテ要スルニ生産費等ノ節約ニ依リ林質減退ニ伴フ收入減ヲ補足セントスル消極策ニ依ラントスルモノナリ

五 採木公司ノ専採区域擴張計畫経緯

鴨綠江採木公司ハ創業後數年ニシテ既ニ其ノ専採区域  
森林ハ漸次江岸ニ遠サカリ來リ生産費ノ増加及作業ノ  
困難ニ早晚逢着スヘク前途甚ク憂慮スヘキモノアリシ  
ヲ以テ公司側幹部ニ於テハ豫テ専採地区ノ擴張ヲ目論  
見居リタルカ吉林省濛江縣地方松花江流域ノ廣大ナル  
森林ニ着目シ大正五年中村田理事長等ハ同地方ニ出張  
シ實地踏査ノ結果其ノ有望ナルヲ確認シタルカ當時支  
那側官民共ニ餘リ之ニ着眼セシ僅カニ松花江林業公司  
支那官民合辦ニシテ資本金壹百萬圓カ松花江上流濛江  
撫松額穆各縣一帶ノ森林ニ對シ伐採權ヲ得居レルノミ  
ニシテ而カニ資金調達難ニテ事業不振行儀ニトナリ居  
レルヲ以テ採木公司ハ之ト合同經營ニ依ルヲ最善ノ策

ナリトシ恰モ右林業公司經營ノ當リ居レル胡宗瀛  
カ元鴨綠江採木公司ノ理事長ナリシ關係上先ツ之ニ對  
シ協議ヲ進メタルカ偶ニ當時採木公司ト大倉組トノ合  
辦經營タル安東鴨綠江製材公司カ吉林ニ分工場ヲ設ケ  
トトシ既ニ建築ヲ開始シ居レルヲ以テ將來右工場ヲモ  
利用スルコトトシ該專採區域擴張方ヲ當局ニ進言スル  
所アリタリ此間前記松江林業公司總理高啓明ハ鴨綠江  
採木公司ノ事業視察ヲ名トシテ安東ニ來リ小洋銀六萬  
元ノ借款方ヲ申出テ更ニ翌六年ニ至リ五萬元ノ借款ヲ  
提議シ來レルヲ以テ何レモ同林業公司ノ株券ヲ抵當ト  
シテ承認シ別ニ木材買收ノ先渡金トシテ三萬六千元ノ  
貸付ヲナシタルカ右ハ鴨綠江採木公司カ將來松花江森  
林方面ニ進出スヘキ道程トシテ特殊ノ關係ヲ取付ケ置

クヲ得策トセルニ因ルモノニシテ此外公司ハ大正四年  
頃ヨリ支那側運木局カ渾江流域ヨリ濛江縣ノ森林地帯  
ニ通スルニテ輕軌敷設ノ計畫ヲナシ公司ニ借款ヲ  
希望セルニ對シ銀二十萬元ヲ限度トシ鐵道材料ヲ擔保  
シ借款ヲナシタル等銳意松花江方面ニ進出ノ準備ヲ進  
メタリ

元來鴨松西江流域ノ森林ハ分水嶺ニ於テ殆ト其ノ境界  
ヲ明カニセス且ツ撫松安圖濛江各縣森林ヨリノ產出材  
ハ交通ノ關係上吉林ニ出ツルヨリ寧口鴨渾ニ江ヲ經由  
シ安東ニ流下スル方便利ニシテ木肥等ハ鴨綠江採木公  
司ノ成立以前ヨリ松花江森林内ニ進出シ大正六年ニ於  
テハ分水嶺ヨリ十餘邦里ノ地點ニ於テ伐木ヲナシソツ  
トル状態ニシテ公司カ前記ノ借款等ヲナシテ專採區域

擴張ヲ企劃セルモノ全ク故ナキニ非ス  
然ルニ其後本計畫ハ吉林地方支那側民ハヲ聳動シ督軍  
及省長等ニ對シ松江林業公司ハ鴨綠江採木公司ニ其ノ  
專採森林ヲ賣却スルモノナリト誣言ヲナスモノアルニ  
至リタルヲ以テ本合辦事業ヲ成立セシメントセハ地方  
的ノ協議ヲ避ケ中央ニ於テ支那側ノ諒解ヲ取付クル要  
アルニ至レルヲ以テ機ヲ見テ交渉ヲ開始スルコトトセ  
ルカ其後開議スルニ至ラス今日ニ及ヘルモノナリ

六、鴨綠江採木公司拂下問題經緯（本項秘）  
一、事件ノ發端

大正五年三月採木公司ノ民間拂下問題宛ニタルカ同月  
上旬大隈内閣ハ左ノ通り閣議決定セリ

(一) 鴨綠江採木公司ハ日清條約ノ明文ニ依リ官營試辦  
一年ノ後之ヲ民營ニ移轉スヘキ筈ナリシニ在英治  
シト十年以テ今日ニ至レルモノナルカ今ヤ公司事  
業ノ根底確立セルニ付テハ此際民營ニ移轉スルノ  
件ヲ實行スルコト

(二) 民營移轉ニ付テハ日支合辦會社ノ日本側ノ株主  
ルヘキ引受人ハ大倉喜八郎男ヲ滿洲ニ於テ各般ノ  
事業ヲ經營シ現ニ採木公司ト合辦ニテ製材所ヲ設  
ケ鴨綠江流域ノ材木調製販賣ニ從事シツツアル事



由ニ顧ミ同男ヲシテ之ニハムヘキコト

右閣議決定ニ基キ民營移轉準備事項ニ付左ノ通り外務大藏兩省間ニ議定ヲ遂ケタリ

一 採木公司官營ハ元來日清兩政府ノ營利ノ為ニ設ケタルモノニ非ス日支合辦營利會社ノ設立ニ先ケ試

辦ヲ目的トシタルモノニシテ而モ公司ハ創立以來

毎年相當ノ利益配當ヲ受ケ來リタルコトナレハ茲

ニ之ヲ民營ニ移スニ當ツテハ帝國政府ハ其出資金

額ヲ回收スルヲ以テ足レリトスヘシ

二 前項出資額ヲ徵スルニ付テモ必スシモ一時回收ヲ

要セス之ヲ數年ニ分納セシムルニ可ナリ

右閣議決定ヲ見ルニ至レル裏面ノ事情ニ関シ大正五年

參本部調査並大倉組側記録ニ依レハ同年三月七日ノ閣

議ニ於テ對支方針ニ関スル決定ヲ見タル前後該方針遂

行ニ必要ナル資金ノ調達方ニ齊心ノ結果外務陸軍兩當

事者ヨリ大倉組ニ向ツテ協議ヲ開始シ同月十九日爾親

王ヲ借主トシテ大倉組ヨリ金百萬圓ヲ代理川島浪速及

土居陸軍少將ヘ夫々八十萬圓及二十萬圓ヲ交付シタル

趣ニテ當時大倉組ハ之カ交換條件トシテ採木公司帝國

政府持分ノ讓與ヲ求メ尚大倉ニテハ政府ニ於テ此約諾

ヲ容ルルニ於テハ右百萬圓ノ外其對償トシテ別ニ大倉

ヨリ金百五十萬圓ヲ政府ニ提供スヘキ旨ノ約諾ヲナシ

置タル由次テ同年九月政府ノ希望ニ應ジ更ニ金五十萬

圓ヲ融通スルニ先ケ同組ヨリ此機會ニ於テ可成ニ支

那政府ニ交渉ノ上合同商辦實現方配慮ヲ仰度旨付入レ

タルニ對シ石井外務大臣ヨリ政府ニ於テモ民辦經營實

行ニ必要ナル資金ノ調達方ニ齊心ノ結果外務陸軍兩當

事者ヨリ大倉組ニ向ツテ協議ヲ開始シ同月十九日爾親

王ヲ借主トシテ大倉組ヨリ金百萬圓ヲ代理川島浪速及

土居陸軍少將ヘ夫々八十萬圓及二十萬圓ヲ交付シタル

趣ニテ當時大倉組ハ之カ交換條件トシテ採木公司帝國

政府持分ノ讓與ヲ求メ尚大倉ニテハ政府ニ於テ此約諾

ヲ容ルルニ於テハ右百萬圓ノ外其對償トシテ別ニ大倉

ヨリ金百五十萬圓ヲ政府ニ提供スヘキ旨ノ約諾ヲナシ

置タル由次テ同年九月政府ノ希望ニ應ジ更ニ金五十萬

圓ヲ融通スルニ先ケ同組ヨリ此機會ニ於テ可成ニ支

那政府ニ交渉ノ上合同商辦實現方配慮ヲ仰度旨付入レ

タルニ對シ石井外務大臣ヨリ政府ニ於テモ民辦經營實

現致サセ度内意ニ付相當措置ヲ講スル事順ナル趣返答  
シタリ其後同年十月三日市來主計局長(大藏省)村田採木  
公司理事長大倉發身及當省小池政務局長藤田會計課長  
小村第一課長會合ノ上東三省林務局長兼吉林林業公司  
董事胡宗瀛ト大倉組トニテ合辦會社ヲ組織シ右會社ニ  
採木公司ノ權利義務一切ヲ承継セシムルコト可然ト協  
議ニ尚我方出資額百五十萬圓ニ對スル大倉組ヨリノ納  
付方法及政府カ回收スヘキ總額決定並ニカ大倉ヘノ交  
涉ハ大藏省之ニ當ル一キコトヲ定メタリ

二、日支交渉ノ經過

前顯閣議ノ決定等ニ基キ同年九月在支公使及在奉天總  
領事ニ對シ本件民營ニ對スル支那中央並奉天政府ノ意  
向問合方訓令シ大倉組ニ於テモ在北京及奉天各代表者  
ヲシテ裏面ヨリ支那當該官廳ニ接洽シタル結果翌大年  
一月二十日附公文ヲ以テ支那政府ヨリ支那側ハ從前通  
リ官辦トシ日本側ノミ商辦ニ改ムルコトニ異議ナキ旨  
回答ニ接シタリ

本文交渉中注意スヘキ點凡ソ如左

ハ本文交渉ニ對シ日支往復公文ハ勿論表面上ハ單ニ公  
司ヲ商辦ニ移スノ可否ニ付意見ヲ交換シタルモノ  
ナルモ日本側承継者カ大倉組ナルヘシトノコトハ  
裏面ノ事實トシテ内密ニ支那側ハ通告セラレ共了

解 = 於テ交渉纏マリタルモノト見ルヲ妥當トスヘシ

(四) 支那側カ依然官辦トシテ存スヘシト云フハ支那農商部 = 於テハ商股ノ募集困難ナル理由ヲ以テ本件民營實行方一時見合セ度意志ナリシニ伴張作霖ノ意向 = 基キ支那側官辦我方商辦ノ案成立シタル次第ナリ、尚在安東支那紳商ハ支那側持分引受方協議シタルモ結局纏マラス又大倉組 = 於テ右支那側出資額一部融通方差支ナキ意向ヲ有シタリシモ之亦立消ト成リタル次第ナル處支那側民營ノ纏マラサリシ理由トシテハ(四)張督軍 = 於テ出資者ノ一人タルコトニ賛成セザリシコト(由)公司支那側役員中民營トセハ其ノ事業缺損ノ事實カ外部ニ暴露シ從テ

關係者ニ悪影響アルヘキコトヲ悞レ之ヲ悦ハザリシ者下ルコト(一)支那側理事長選任 = 関シ多少ノ紛糾アリタルコト等ヲ擧ゲ得ヘキモノノ如シ

三 大倉組ト政府トノ交渉

前述ノ通大隈内閣ハ閣議其他關係當事者ノ協定 = 基キ本公司帝國持分拂下ノ為内外ノ準備ヲ進捗セシメタルニ偶々五年十月内閣ノ更迭ヲ見後継寺内内閣ハ前内閣ノ着手ニタル對支交渉ハ之ヲ繼續シ結局前記ノ通り成立ヲ見タルモ拂下實行 = 付ラハ本件カ既ニ第三十八議會ノ問題ト成リ世論ノ注目ヲ惹キタルコト = 鑑ミ且大隈内閣ハ法律上ハ大倉 = 對シ拂下ノ義務ヲ有セス從テ新内閣亦德義上ノ義務ヲ有スルニ過キストノ見解ヲ採リ之カ拂下ヲ實行シテ政治上ノ責任ヲ加重スルヨリモ

率口自重警戒シテ當時ノ現状ニ放棄シ置クヲ得策トス  
ルノ態度ニ出テタル為本件ハ其後何等ノ開展ヲ見サリ  
キ  
超エテ原内閣ニ至リ大正八年一月十八日大倉組ヨリ拂  
下問題來歴概要及石井外務大臣書翰寫ヲ添ハ拂下實行  
方書狀出願ノ次第アリタルヲ以テ爲ト研究ノ結果同年  
五月二十一日原首相自ラ大倉男ト會見大隈内閣時代ノ  
約束ナルモノハ確定的ニ成立シ居レルモノトハ認メ難  
ク且本問題ニ付テハ從來種々ノ世評又傳ハリ居レル次  
第ニ付政府ニ於テハ同公司拂下ヲ許可スルコトハ到底  
詮議シ難キ旨申聞ケタル處大倉男ハ大隈内閣閣議ノ決  
定其他約束ヲ擧ケテ今更政府ニ於テ人民ノ利益ヲ顧ラ  
レサル如キコトアリテハ甚夕迷惑ト思考スル旨ヲ述ハ

タルニ對シ首相ヨリ閣議決定ハ素ト政府内部ノ問題ニ  
屬シ只其意志ヲ決定シタル迄ニテ外部ニ於テ彼是之ヲ  
援用スヘキ筋合ニ非ス又所謂大隈内閣ノ約束ナルモノ  
ハ前言ノ通り適法ニ成立シ居レルモノトハ認メ難ク現  
ニ寺内内閣又之ヲ實行セザリレ次第ニテ現内閣トシテ  
ニ拂下ヲ許可シ難キ旨ヲ斷言シ尚爾後政府ヲ羈束スル  
カ如キ説明ハ一切之ヲ避ケタリ次テ六月六日附書面ヲ  
以テ大倉男ヨリ右一月十八日附願書撤回方申込ニ接シ  
タルニ付原本一括先方ヘ回付シタリ後出大正十一年十  
月大倉組ヨリノ再願書副申中ニ本件ハ懸案ノ儘原内閣  
ヨリ高橋内閣ニ推移シタリトアルハ用語妥當ナラス  
然ルニ聖大正十一年十月二十五日大倉組ヨリ本公司我  
國持分權ヲ相當對償ヲ以テ拂下方及拂下アリタル上ハ

大倉ノミノ單獨經營ニ委セヌ之ヲ中心トシテ滿洲ニ於ケル日支合辦森林業ノ大合同ヲ劃策スヘキ意嚮ナル旨内田大臣宛申請シ來レル處新請願書ニ於テハ全ク大隈内閣以來ノ行憲ニ言及セヌ單ニ「曩年本件ニ對スル我政府當局カ支那政府當局ニ折衝ノ結果支那側該公司ノ當事者竝ニ支那政府共ニ我國ノ持分權ヲ大倉組ナラハ移讓セラルルコトニ異存ナキ旨ノ意向ヲ明示シタル由確聞シタル次第ヲ述ヘ居ルニ過キス

右請願ニ對シ政府ハ何等ノ措置ヲ執ラザリシ處大正十三年三月六日合名會社大倉組大倉商事株式會社王子製紙株式會社及秋田木材株式會社各代表者連名ヲ以テ大正十一年大倉組名義ヲ以テセル請願ニ追從シ本公司ニ對スル帝國持分ヲ右諸社ニ拂下方出願シ來レリ、

而シテ其内容ハ大部分大倉組名義ノ請願ト同様ニシテ前同ノ請願カ一社ノミノ關係ナリシヲ變ニテ新ニ前記四社ノ名ヲ以テシタル所ヲ異ニスルノミ而シテ右請願ニ對シテモ政府ハ何等ノ措置ヲ執ラザリシカ如シ

#### 四、拂下ニ關スル諸問題

以上記載ノ通り大隈内閣ニ發シタル拂下問題ハ大正十一年六月大倉組來柬ニ依リ一ト先結末ヲ告ケタルモノニシテ大正十一年十月以降ノ請願ハ別箇新規ノ事件トシテ之ヲ取扱フヲ要ス唯夕往年支那當局カ本件公司我持分ニ關シ民營ニ移轉方異議ナキ旨ノ意志ヲ表示シタルコト炳乎トシテ存スルノミ、此基礎ニ立テテ本問題ヲ考究シタル結果概テ如左

#### 由法律的關係

(大正六年中大藏省調査印刷物参照)

11) 本公同帝國持分ハ大正十年國有財産法第一條及同法施行令第一條第五號ニ依リ出資ニ因ル權利タル國有財産ニシテ同法第二條第四號ニ所謂雜種財産ヲ構成ス從テ右持分ハ讓渡ノ目的ヲ得ヘク(同法第四條)ニテ賣拂ハムトセハ原則トシテ公告ニヨル競争入札ニ附スルヲ要ス(會計法第三十一條)但シハ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設ケ得ヘク(國務大臣ノ撰擇ニヨリ指名競争ニ付シ又ハ)隨意契約ニ依ルコトヲ得(同條)及國有財産法施行令第十二條)而シテ隨意契約ニ依リ得ル場合ニ關シ尚會計規則第一百四條以下ノ規定アリ(特ニ同條第十五號第十九號及第二十一號参照)

12) 前項ニ基キ國內法上ノ關係ニ於テ各種ノ準備行為ヲ必要トス例ニ我方持分承継人ニ對スル命令書(國有財産法第八條第九條及同法施行令第十三條)并下價格ノ評定並之カ調書ノ作製(同令第十一條)第十二條)尚本件ニ付テハ大藏省調査ニ係ルモノニアリ一ハ主計局長ヨリ内示ノモノ(同條)不明他ハ大正六年八月調査ノモノ也又前ニ當時ノ理事長村田氏調査ニ係ルモノアリ及公司日本側理事長ニ對スル命令書ノ如キ之ナリ(以上二種命令書案ニ付テハ先年調製ニ係ルモノアリ)

13) 支那側ノ官辦トシテ存スルト民辦ニ変更スルトニ係ラヌ我方持分ヲ拂下クルニ方リテハ先

ツ支那側ト交渉シテ民的分子ノ入リタル本公  
司ノ經營方法ニ関シ新規協定ヲナスヲ要ス蓋  
シ(1)現存協定ニハ本公司民營ノ曉ニ於ケル國  
籍明定シテラス從テ將來諸種ノ紛議ヲ避クル  
為豫メ其國籍ニ関シ日支間ニ了解ナカル可ラ  
ス而シテ之ヲ日本商法ニヨル法人ト定ムルコ  
トハ公司業務上ノ地理的關係ヨリ見テ支那側  
ノ容易ニ肯シセサル所ナルヘク寧口初メヨリ  
之ヲ支那會社トシ只支那法令ノ不完全ヲ補  
フ為兩國間ニ特殊協定ヲ締結スルヲ得策トス  
ヘシ(2)明治四十一年公司業務章程第ニ條ニヨ  
レハ民營移轉ニ先ケ株式募集章程ヲ制定スル  
要アリ(3)現存協定ハ官辦ニ適スルモ民辦ニ不

利ナル點アリ例之督辦ハ必ス奉天省東邊道台  
兼任シレコト、公司使用人ハ日支兩國人ヨリ  
同數ヲ出スノ主義ヲ採レルコト等(其他諸般ノ  
改正點アルヘク右等ニ付テハ公司當事者ノ意  
向ヲ問合ヌノ要アルヘシ)

4)本公司ノ營業期限ハ昭和八年五月ニ至リ満了  
スル處若シ支那政府ニ於テ之カ期限延長ヲ許  
可セザラズハ後述經濟關係ノ部ニ述フルカ  
如ク各種ノ不都合ヲ生スルノ懼アルヲ以テ適  
當ナル機會ニ於テ營業期限延長方支那政府ニ  
交渉スルヲ得策トスヘシ

### 經濟的關係

1)公司業務ノ現狀ニ於テ之ヲ民營ニ移スノ可否

ニ付テハ目下在安東領事ニ於テ内密之カ調査  
一齊リ居レリ

必本公司利益配當金トシテ毎年數千萬円宛國庫  
ノ收入下リ故ニ民營移轉ニ関シテハ大藏省側  
ノ意向ヲ参酌スルノ要アリ

3) 過去ニ於テハ木材伐採ヲ主トシ新ニ殖林スル  
ニトハ幾ニトテ度外視セタルモノノ如キモ  
如此ハ國家百年ノ大計ニ非ス然リ而シテ前記  
ノ通り本公司營業期間ハ餘ス所僅ニ十年ニ滿  
タス從テ今日ニ於テ新ニ殖林ヲ始ムルモ公司  
ノ經濟ニハ何ノ效果ヲモ齊ラサス且軌道ノ布  
設其他資本ノ固定ヲ來スカ如キ類ノ施設ヲ為  
マハ向後十年ハ短キニ過クルノ怨下リ以是

新ニ支那政府ト交渉シテ該期間ノ延長ヲ計ル  
ト共ニ速ニ殖林其他必要施設ノ途ヲ講スルノ  
要アルヘク内藤理事長ニ於テ目下攻究中ニカ  
決定前ニ在テハ民辦ニ拂下クルヲ得サルヘク  
蓋シ期限延長ノ見据付カサレハ固定資本ノ投  
資ハ民營會社ノ到底決行シ得サレ所ナレハ十

尚大倉等四社連名請願書ニ関シ左記諸點注意ヲ要

ス  
1) 支那側ニ於テハ我方持分ヲ同人共ナラハ移讓マ  
ルコトニ異議ナキ旨ノ意向ヲ有セタルヤノ字句  
アル處前顯ニ(1)記載ノ通り大倉組民營當事者タ  
ルヘキノ了解ハ存セタルモノト見得ヘキモ同人



共ナラハト云ヒテ他人ヲ排除シタル意味ニ解ス  
ルノ果シテ至當ナリヤ否ヤ疑ハシキノミナラス  
同人共ト復數ニスルハ不都合ニシテ大倉組以外  
ノ者ニ付テハ當時何等ノ了解アリタル次第ナラ  
ス  
右ハ大正十一年請願書ノ字句ヲ其儘襲用シテ大  
倉一人名義ヲ多數名義ニ書直シタル結果生シタ  
ル故意又ハ偶然ノ誤ナルヘシ  
以、民管移付ノ實行ハ期限滿了時ニ處スル最良法ナ  
リヤ否ヤニ付テモ多少ノ疑ナキ能ハス右ハ要ス  
ルニ見込ノ問題ニシテ何人モ今日ヨリ其然ルヲ  
豫想シ得サルヘシ  
以、我方持分權ノ拂下アリタル際ハ直ニ之ヲ請願者

等ノ關係スル共榮起業株式會社ニ併合スルノ意  
向ヲ有スル處本公司特殊ノ性質ニ鑑ミ其儘ニ直  
ニ之ヲ他會社ニ併合シ得ヘキ限ナラサルヘク從  
テ若シ大倉組ニ拂下クルコトト成ラハ此點前ニ  
支那側ト協定スルノ要アルヘシ

七、採木公司最後処分ニ関スル諸案  
期間満了後ニ於ケル鴨緑江採木公司処分ニ関シテ  
ハ事業繼續又ハ解散、移讓、新林場設定等論  
議セラルル所アルモ茲ニハ單ニ九記ニ案示ヲ掲  
ケテ参  
考トス

甲、内藤理事長案要旨  
乙、在安東西澤領事案示

甲. 採木公司最後処分ニ関スル内藤理事  
長建議ノ要旨

採木公司營業年限ハ剩ス所七箇年ナルモ木材  
生産ヨリ取引ニ至ル階程及資金回收等ニ関スル  
特殊事情ヨリ見テ右剩餘期間ハ積極的企畫  
ニ適セサルカ故ニ今ヤ公司最後ノ処分案ニ付考  
慮ス可キ秋ナリ

公司最後ノ処分案ニ付現在ノ業態ヲ持續セシ  
ムルノ消極的方針ヲ採ルニ於テハ

- 一) 營業期間滿了後残務整理ニ必要ナル期間ヲ  
協定ニ依リ延長シ其ノ完了ヲ俟テ解散スルコト
- 二) 現在事業ヲ第十九年度末(大正十六年十月末  
日)ニテ打切り残餘六箇年間ニ残務整理ヲ

完了スルコト

三) 營業期間ノ更新延長ヲ目的トシ事業繼續ノ交渉ヲ為スルコト

ノ三安ホアルヘキモノニ付テハ殘務期間内ノ事業收拾ニ買回料拒否、漂木整理權、貸款回收等ノ諸案件ニ伴フ豫想外ノ障礙アルヘク、ハ右障礙ヲ輕減シ得ルモノト共ニ公司既往ノ業績ヲシテ單ナル營利企業ノ形式ナルノ形式ヲ脱セシムルヲ得サル缺陷アリ又、ハ生産費昇騰及鴨綠江木材ニ對スル市場關係ノ推移等ヨリ見テ危險性ヲ附隨スルノミナラス公司ニ對スル支那官民ノ感情等ヨリ考フレハ期限更新ノ協定順調ニ成立シ難カル可シ

以上三案共ニ不可ナリトセハ公司設立當初我カ政府ノ根本目的カ採伐利益ノニ偏セス廣ク滿洲地方ニ於ケル完全林業ノ經營ニ在リタリシ事情ニ鑑ミ

一) 現在事業ハ第十九年度限り(大正十六年十月末日)

ニテ打切り資産整理完了ヲ俟テ公司ヲ解散シ

二) 公司最後ノ資金ハ別ニ日支兩國政府間ニ締結

セラル可キ新協約ニ基キ支那政府ニ於テ實行スル

滿洲林業事項ノ整理開發資金トシテ公司貸

款ノ形式ヲ以テ支那政府ニ移讓スルコト

ノ案ニ依ルヲ最モ適切有益ナリト認ム

本案ホ正當トスルニハ

一) 公司最後資産運用ハ適法ナリヤ否ヤ

二) 滿洲林業整理開發ノ必要アリヤ否ヤ

ノ二點ヲ考査スルヲ要スル処次ノ理由ニ依リ其ノ各  
當必要ナルニト明ナリ

ハ) 本案事業ハ公司章程中ノ項目ニ明記ナキ所  
ナルモ日支兩政府ノ協定成立スルニ於テハ其ノ公司  
自ラ實行スル業ナルト否トニ拘ラス公司次資産ノ  
運用ニ関シ何等ノ支障ヲ見ス(現ニ公司ニ於テ章  
程以外ノ事業ニ投資セル安具例甚カラス)

四) 我國ハ目下木材輸入國ニシテ材價ノ騰貴ト人  
口ノ増加ノ爲住宅難ヲ加ヘツアル處隣接地タル  
滿洲殊ニ黑龍江吉林省ニハ大森林ヲ藏スル  
モ支那側ハ之カ荒蕪ニ委シテ顧ミサル現情ニ於  
テ之カ開發ハ日支兩國ノ一大利益タルノミナラス農  
耕地開發ノ爲ニモ緊切事項ナリ

本案ニ依リ公司解散ニ関スル日支新協定ヲ以テ  
規定スヘキ要目次ノ如シ

一) 奉天政廳ニ林務總局ヲ置キ滿洲林業ノ整理  
開發ニ関スル各般ノ事項ヲ管掌セシム  
二) 林務總局ニ日本人高級顧問及名林務局ニ日  
本人顧問ヲ置キ各局事務員及技術員ニ日  
本人ヲ併用ス

林業事項ニ関スル會計ハ特別會計トス  
公司最後資産手續

ハ) 公司貸款トシテ支那政府ニ移讓ス  
四) 貸款期間ハ資産爲ハ渡ヨノ二十ヶ年

ハ) 利子ハ公司存續中ハ無利子トシ解散後ハ  
年利(何程)ノ割合ニテ毎年日本政府ニ支拂フ

(一) 移讓資産ハ整理ノ状況ニ應ジテ數回ニ分割シテ引渡ス  
(二) 本件貸款ノ整理ハ日本政府ノ監査ヲ受ク

乙、採木公司最後処分ニ関スル在安東西澤領事安ホ

大正十五年九月中内藤理事長建議ニ係ル鴨綠江採木公司最後処分安ホハ是ヲ一言ニ要約スル時ハ第十九年度(昭和二年十月三十一日)限り公司現事業ヲ打切り残餘六ケ年間ヲ以テ整理期間ト爲シ右事業打切ニ依リ生スル遊資ヲ滿洲林業事項整理開發資金トシテ公司貸款ノ形式ヲ以テ支那政府ニ融通シ東三省内ニ林務行政機關ヲ設置シ以テ滿洲林業ノ根本ヲ確定セシムトスルニ在ル處今之ヲ大觀スルニ本安ホハ  
(一) 東三省ノ政情カ今猶チ中央政府ノ動搖圈内ニ在リテ軍閥ノ跳梁群雄ノ爭奪割據ハ

黨一派ノ勝算ヲ夢ミシニ欲ベシ圖ル外民衆滄土  
炭ノ苦ヲ顧ミス國家存立ノ根本ヲ培ヒ産業立  
國ノ基礎ヲ鞏固成ラシムトスルカ如キ當リ爲  
政者ノ秋毫ト虽顧念スル処ニハス

(一) 況ヤ林務行政機關ノ設置並是ク運用 必至的  
ニ東三省政權ノ確立ト行政組織ノ統一ヲ別提ト  
セサルヘカラス

(三) 殊ニ公司最後処分案ニ關聯シテ本計ニ畫ヲ建  
ツルカ如キハ格段ノ謂ナキノミナラス將來東三省カ  
政情安定ノ曉有力ナル政府ヲ樹立シ産業開發  
ニ目醒ムル場合ニ在リテハ政府ハ進テ此種經濟的  
財政的ノ援助ヲ爲スニ躊躇セサルヘキコト  
等ニ想到スルトキハ本案ハ寧ろ實際ニ迂遠ナル

理想論ト認メラルルノミナラス現ニ安東ヲ過去十數  
年來ニ毎年二百乃至三百万尺メ(對岸新義州着材  
ハ五十万ヲ出テス)ノ着筏木材市場トシテ邦人製材  
工場ノ數ニ六是ニ依リテ直接間接衣食スル者居  
住人口ノ二割ヲ占メ採木公司カ多年斯業ノ樞軸ヲ  
握リ邦人活力ノ營養素トナリ兼テ内地朝鮮  
ニ巨木材需給ノ關係ヲ調節シ來リシル當面ノ事  
實ニ對シ何等現實ナル解決ヲ共ハサル點ニ於テ採  
木公司最後処分案トシテ妥當ニ非サルモノト思考ノ  
セラル

此點ニ關聯シ世間往々鴨江材カ蓄積僅少材質  
不良ニシテ他方逐年生産費ノ增高スル理由ヲ以テ  
其ノ將來ヲ見限ラムトスル者アリト虽累々ニ大正十三年

中理事長ノ視察報告ヲ單ニ計畫的ノ施業目  
標トナルヘキ主要林相ノ大團地ニ對スル大局乃至内  
輪ノ觀察ニ止マルモノナルトハ該報告書中理事  
長ノ釈明スル処ニシテ材質ノ低下生産費ノ增高ノ  
如キハ數ノ免レ難キ処而モ猶是ヲ吉林業滿材ニ比  
較スルトキハ取引ノ餘地大ナルモノアルニ徴スレハ採木公  
司期限滿了後數十年ヲ経過スルモ猶鴨江材ハ  
依然トシテ安東市場ニ出廻ルモノト認メサルヘカラス  
於茲カ採木公司最後処分案ハ其當面ノ目的ヲ  
安東居住邦人ノ産業發展ニ求メ(固ヨリ優勝  
劣敗ニヨリ自然淘汰ハ人爲ノ克スル処ニ非サルニシテ  
ラス既ニ其必要ヲ認メラル)併セテ日支ノ共存共栄  
ニ資シ母國ニ對スル木材需給調節ノ鍵ヲ把握セ

シムルヲ以テ其要諦ト爲ササルヘカラス  
此ノ見地ニ立テ大体尤記ノ考察ヲ以テ妥當ノ処置  
ト認メラル

一)採木公司ノ事業ハ此迄是ヲ維持スルハ勿論公司  
支那側ノ經費要求ヲ容ルト共ニ我方ニ於テモ將  
來邦商ノ地歩ヲ鞏固ナラシムヘキ各般ノ施設方  
策ヲ調査考窺<sup>レ</sup>積極的ニ投資スルニト(事業  
ノ繼續ヲ必要トスル)我方主張ノ理由ニ関シテハ大正十  
三年五月六日中内藤理事長上流地方視察報  
告附録意見書参照)

第十九年度(昭和二年十月三十日)ヲ以テ公司ノ事  
業ヲ打切り殘餘六ヶ年ヲ以テ公司ノ清算期間  
ト爲シ何等支那側ト折衝商議ヲ企圖スルカ如



キハ支那側ヨレテ却テ利権回收ヲ促進セシムル  
結果ト成リ邦商事業界ノ被ル不安ト當面ノ  
打撃等ハ論ナク忽ニシテ支那側料棧ノ公司解  
散要請ヲ誘致シ少トモ買田料ノ減廢運動ヲ  
惹起スルハ火ヲ賭ルヨリモ明ナルニ付此ノ案ハ孰  
レノ場合ニ於テモ絶対之ヲ避クル要アルヘク寧ろ  
此依事業ヲ繼續シ期限ニ至リ支那側ノ開  
談ヲ俟テ一應日清合同材木會社章程第  
七條ニ依ル期限ノ更新ヲ從憑シ結局後述ニ  
ノ解決案ニ落着センル様努力カスルヲ以テ策  
ノ得シルモノト思料セラル。況ヤ向後貸款中  
收不能見込額ヲ切捨テ資産勘定ヨリ之ヲ  
除却スルカ如キハ懸引上最拙劣ナルモノニシテ此

種ノ貸款カ專ラ支那人ナル事實ニ想到スレハ  
將來支那側トノ交渉顛末如何ニ拘ラス嚴ニ  
慎クキコトニ屬ス

(二) 公司期限滿了後期限延長ノ交渉成立セサルニ  
於テハ當地鴨綠江製材材無限公司(大倉ト  
採木公司ノ折半出資)カ其他ノ製材材工場ニ  
十六七所ノ使用原料ニ對シ其ノ五割以上ニ相當  
スル原木ヲ消化スル(別添参考第一號参照)實  
勢カシ有レ日支商ノ間ニ信望厚ク殊ニ大倉ノ  
出資ニ成ル鴨綠江製紙株式會社カ最近事  
業ヲ復活再興シテ支那側ノ製材出(バルブ製材  
産能力年額一万余千屯)ヲ以テ支那紙年密約  
七千屯ヲ産出スルヲ開始シ其原料材ニ於テ向後

年額二十五万尺メ前記製紙原料ノミトシテモ  
約十三万尺メノ需要アル事情等ヲ考量ニ加  
ハ將來當地邦人木業界ノ地保ヲ確保シ何等  
カノ形式ニ於テ採木公司ノ事業ヲ継承セシムル  
ニハ無限公司ヲ措テ他ニ適當ノモノ無之ヤニ心  
料セラルルニ付最後案トシテハ前記無限公司ヲ  
シテ

イ官(支那側)民(大倉側)合辦ノ會社ヲ組織  
セシメ公司日本側ノ資本金ヲ以テ事業ヲ純  
承セシムルカ或ハ

四清算資本金折半額(第十九年度決算ニ於  
テ公司ノ資産勘定ハ八百万元以上ヲ算サス)ヲ  
大倉ニ交付シ有力ナル支那側料棧ニ三ト提

携シテ民官合辦ト為サシムルコト

惟フニ採木公司ノ特徴即チ其營業ノ保障ハ買  
回料徴收ト漂木整理ノ特權ニ在リ又安貝際之  
カ為採木公司ハ從前ニ於ケルカ如キ成績ヲ收メタ  
ルモノニテ直營材ノミヲ以テハ所詮採算不可能ナ  
ルカ故ニ支那側官憲トノ合辦ヲ有利トスル理由  
モ自ラ明ナル処前記ノ案モ亦將來此組織ニ依  
リ依然買回料(現行九分ノ如キ高率ハ敢テ之ヲ  
必要トセス)ヲ徴收スルカ然ラサレハ多少ノ山價ヲ徴  
シ以テ其營業收支ノ安全ヲ企圖セムトスル次第ナリ  
尤モ仮令支那側官憲トノ合辦成立セサル場合  
ト虽現ニ支那側料棧カ山價・木税ハ固ヨリ高率  
ナル買回料ヲモ納付シ猶且木材ノ賣買取引ニ

從事セル實情ニ鑑ミル時ハ貪欲飽クヲ知ラサ  
ル支那官憲ト虽木材市價ヲ無視シ市場取  
引ヲ全然不可能ナラシムルヲ如キ自殺的ノ苛斂  
誅求ヲ爲ササルハ觀易キ道理ナルヲ以テ(四)案ホノ  
通り無限公司(大倉組)ヲシテ有力ナル支那側  
料棧ト共同經營セシメラルルニ於テハ純然タル民  
辦ト虽必スヤ相當ノ成績ヲ出サクルコトヲ得ヘク  
又政府カ清算ヲ受領額ノ一部又ハ全部ヲ融通  
シ大倉組ヲ通シテ該合辦事業ニ投資セララルルニ  
於テハ無限公司カ從前最嫌忌シタル貸金材ノ取  
扱モ亦敢テ是ヲ辞セサルモノト思料ス 蓋シ貸金  
前貸ノ方法ニ依ラサル邦商一般ノ木材取引ハ採  
木公司解散ノ曉ニ於テ自然支那側料棧ノ制

肘ヲ免レ難ク到底支那商ト拮抗シ難キハ何人  
モ異存ナキ処ナレハナリ(採木公司直営材ト料棧  
及公司ノ貸金材トノ比較ニ関シテハ別添参考第  
三號参照)

参考第一號

日本人製衣材数量調

年度別	一般製衣材原料	無限公司製衣材原料	計
大正十年度	五三五〇一九尺×	一七四、九八一尺×	七一〇、〇〇〇尺×
大正十一年度	四八一、九一六	三四八、〇八四	七三〇、〇〇〇
大正十二年度	五五七、〇〇九	三五四、九一一	九一、九二〇
大正十三年度	二八四、九二〇	二二〇、〇七四	五〇五、〇〇〇
大正十四年度	二〇九、八三〇	一八〇、一七〇	三九〇、〇〇〇
平均	四一三、七四〇	二三五、六四四	六四九、三八四

製衣材工場敷二十六ヶ所  
支那側製衣材工場一ヶ所

5/11

参考 第二號

日本人及支那人取扱別数量

年度別	支那人取扱数	日本人取扱数	計
大正十年年度	二、三九三、〇〇三 尺×	九一〇、〇〇〇 尺×	三、三〇三、〇〇三 尺×
大正十一年年度	一、五〇八、七三六	八八〇、〇〇〇	二、三八八、七三六
大正十二年年度	七三八、六九九	一、二一九、九二〇	一、八五〇、六一九
大正十三年年度	九九〇、四一五	六八五、〇〇〇	一、六七五、四一五
大正十四年度	一、三四六、一〇〇	五四〇、〇〇〇	一、七八六、一〇〇
平均	一、三四九、三八三	八二五、三八四	二、一七四、七六七

参考 第三號

自大正十年 至今年間ノ調査 至大正十四年

年度	株式会社直営数量	料棧及公司貸付材	計
大正十年年度	三三三、四四四 尺×	二、八三九、五九九 尺×	三、一七三、〇〇三 尺×
大正十一年年度	四一三、四八〇	一九七五、二五六	二、三八八、七五六
大正十二年年度	四三六、五一二	一、四一四、〇六七	一、八五〇、五一九
大正十三年年度	三〇四、〇四七	一、三七一、三六八	一、六七五、四一五
大正十四年度	三九七、六二七	一、四二八、四七三	一、七八六、一〇〇
平均	三六九、〇二二	一、八〇五、七四五	二、一七四、七六七

22/11